

(続紙 1)

京都大学	博士（教育学）	氏名	松尾 美香
論文題目	大学における冒険教育の実践とその教育効果		
（論文内容の要旨） 冒険教育とは、自然の中で行われる野外活動や冒険活動に伴うリスク、チャレンジ、ストレスなどの要素を活かして、自分と他者、または自分自身との関係についての認識を深めさせ変容を促す教育のことである。海外では、新入生向けプログラムとして冒険教育が広く導入されており、米国やカナダでは数百の大学で実施されている。しかし、日本では、小規模な取り組みやスポーツ系大学での導入がある程度で、広く普及しているとは言い難い。 本研究の目的は、大学における冒険教育の実践研究を通じて、その教育効果を明らかにし、日本の大学に導入する意義を示すことである。 本論文は、序章、終章を含め7つの章で構成されている。序章では、大学が直面している社会的な課題を踏まえ、大学に冒険教育を導入する背景とそのねらいを示した。本研究で対象としたのは、学力的には中位層から下位層の学生が所属する、地方の私立総合大学であり、学生には高校までにうまく対人関係が構築できなかったという者も少なくない。このようなユニバーサル化した大学において、高校から大学への移行を促し、大学での学びを充実したものにする上で、自分が快適でいられる領域であるコンフォート・ゾーンを広げストレッチ・ゾーンに踏み出すことを体験できる冒険教育には教育的意義があるのではないかと考え、研究に取り組んだ。 第1章では、これまで議論されてきた大学における冒険教育の教育的意義を明らかにするために、冒険教育研究の動向と展望を概観した。はじめに、野外教育一般と冒険教育を区別する指標を5つに整理した。ついで、冒険教育を支えるモデルとして、Outward Bound プロセスモデル、カリキュラムモデル、コンフォート・ゾーン・モデル、チャレンジ・バイ・チョイスの原理、経験学習モデルを検討し、冒険教育の教育効果の持続性に関する理論として、学習の転移、変容的学習、状況論を取り上げた。 先行研究の方法論は、心理的な尺度を用いた特定のスキルや能力の事前・事後の測定にとどまっているものが多く、とりわけ長期的な教育効果の検討についてはほとんど未着手である。そこで本研究では、冒険教育のプログラムを設計した上で、量的研究（質問紙調査）に質的研究（参与観察、インタビュー調査）を組み合わせる研究を行った。また、先行研究では、長期的な教育効果が測定されていないため、追跡調査（質問紙調査とインタビュー調査）を行うこととした。 第2章では、上記のモデルや理論についての本研究における取り扱いについて述べた。冒険教育活動のプロセスモデルに関しては、経験学習モデルを主軸に据えて、「冒険教育実践のための経験学習モデル（一日の活動のプロセス）」および「取組全体のプロセスモデル」を提案した。そして、これらのプロセスを通じた学生の学びを支援するためにデザインされたワークシートを示した。 第3章～第5章では、冒険教育の実践研究を行った。まず、第3章では、ある学科の新入生オリエンテーションに PA（プロジェクトアドベンチャー）を組み入れた冒険教育プログラムを行い、その短期的・長期的な教育効果について検討した。その結果、学生たちが対人関係の構築等、大学で新しいスタートを切ることができていること、PA をきっかけに創られた関係性が維持され、「学びの好循環」を生む素地となっていることが明らかになった。 第4章では、コロナ禍の制約下、PA を組み入れた新入生オリエンテーションを大学			

構内で実施できるよう再設計したプログラムを検討対象とした。第3章と同じく、参与観察、学生が記入したワークシート、質問紙調査（満足度調査）、教員インタビュー調査を用いて、施設を利用した PA の大学構内での代替が可能なのかを確認するとともに、その教育効果を検討した。教員インタビュー調査から、高所でのリスクの高い活動に協同で取り組むハイエLEMENTを欠く本取組では、深い信頼関係の構築に限界があることが明らかになった。

第3・4章が新入生オリエンテーションという準正課活動を扱っていたのに対し、第5章では、全学向けの授業科目（体育）に冒険性が高い外海での2人乗りシーカヤックを取り入れた活動を設計し、その教育効果を確認した。学生たちが完全には制御できない自然環境の中で、他者と協同しなければ達成できない課題に、身体も含めた自分の存在全体をかけて取り組むことで、対人関係構築がなされ、学生に変容のきっかけを与えていること、困難な挑戦の達成経験が学生の自信や自己肯定感を高めていること、変容的学習による教育効果が継続し、学部・学年の異なる学生同士でも親密な感情が保持されていることが認められた。

終章では、本研究全体を総括した。第3章から第5章に述べた一連の研究により、冒険教育の教育効果について次の3点が明らかになった。①冒険教育は協同的な活動を要求することから、社会的スキルの涵養に有効であること、②入学直後の冒険教育は、大学への適応を促進し、帰属意識を向上させること、③冒険教育の経験を土台にした学びの積み重ねが「学びの好循環」を生み、それが教育効果の継続性を生むこと、である。こうした教育効果の継続性が生まれたのは、冒険教育が学習者に変容的学習をもたらしたからであろう。より具体的にいえば、冒険教育の持つ挑戦的で協同的な活動、そして自然環境が生む予測困難さへの対処を迫られる活動によって、これまで当たり前だと思っていた参照の枠組み（視点、心の習慣、マインドセット）に深く構造的な変化が生じ、そうした自分の経験を批判的に振り返る機会を持つことによって、学生の参照の枠組みが変換されたと解釈した。また、冒険教育で得た気づき、教訓、考え方が新たな状況へと転移していること、冒険教育プログラムで築いた関係がその後も、学習コミュニティや実践共同体として持続されていることも、追跡調査から確認された。

高い教育効果を期待できる教育プログラムであったとしても、それが導入され普及しなければ意味がない。海外で大規模に実施されている事例について運用方法や運営体制等を調査すること、実行可能性を踏まえた他の冒険教育の可能性を示すことが、今後の課題となる。

(論文審査の結果の要旨)

冒険教育とは、自然の中で行われる野外活動や冒険活動に伴うリスク、チャレンジ、ストレスなどの要素を活かして、自分と他者、または自分自身との関係についての認識を深めさせ変容を促す教育のことである。冒険教育は、北米では広く導入され、ハイインパクト・プラクティスの一つとみなされているが、日本での実践や研究はまだ散見される程度にとどまっている。ユニバーサル化が進行する日本の大学にあって、高校から大学への移行を助け、入学後の変容を促す可能性のある取組として、本研究では冒険教育に着目した。

本研究の目的は、大学における冒険教育の実践研究を通じて、その教育効果を明らかにし、日本の大学に導入する意義を示すことである。研究対象とされた X 大学は、学力的には中位層から下位層の学生が入学してくる地方の私立総合大学であり、不本意入学者や高校までいじめなどで対人関係の構築に困難を抱えていた学生が少なくない。そのような学生を対象にして、冒険教育のプログラムを設計・実践し、その短期的・長期的な教育効果を明らかにすることが本研究の課題とされた。方法としては、短期的効果をみるために、参与観察、質問紙調査、学習ポートフォリオの分析を組み合わせた混合研究法が採られ、長期的効果をみるために、インタビュー調査、質問紙調査を用いた追跡調査が実施された。

本論文は、序章、終章を含め 7 つの章からなる。序章で冒険教育の定義や背景が論じられた後、第 1 章では冒険教育について説明するために用いられてきたモデル・理論が検討された。冒険教育の活動に関するモデルとしては、Outward Bound プロセスモデル、カリキュラムモデル、コンフォート・ゾーン・モデル、チャレンジ・バイ・チョイスの原理、経験学習モデルが、また、教育効果の持続性に関する理論としては、学習の転移論、変容的学習論、状況的学習論（実践共同体論）が検討の俎上にのせられた。第 2 章では、これらのモデル・理論を踏まえた上で、一日の活動については「冒険教育実践のための経験学習モデル（一日の活動のプロセス）」が、また、実践後の影響も含む全体については「取組全体のプロセスモデル」が提案された。さらに、これらのプロセスにそって、経験を言語化し、学習ポートフォリオを紡いでいくための補助として、複数のワークシートが示された。

第 3 章から第 5 章までは、本研究で設計・実践された冒険教育プログラムが記述され、その教育効果の分析が行われている。第 3 章では、PA（プロジェクトアドベンチャー）という屋外施設を用いた冒険教育を新入生オリエンテーションに組み入れたプログラム、第 4 章では、コロナ禍の制約下、PA のエレメントを減らして大学構内で実施したプログラムが、それぞれ検討された。その結果、いずれのプログラムでも、学生同士および学生と教員間の関係の構築や挑戦の達成経験に寄与し、その後の授業やグループ活動にも肯定的影響を及ぼすことで「学びの好循環」を生み出していることが確認された。一方、大学構内で行われたために高所でのリスクの高い（したがって協同を必須とする）エレメントを欠く活動では、深い信頼関係の構築に限界があることも示された。

第 3 章・第 4 章が新入生オリエンテーションという準正課活動であり、特定の学科・コースの新入生を対象としていたのに対し、第 5 章では、全学部・全学年向けの共通教育（体育）として正課の授業で実施されたシーカヤックの冒険教育プログラムが検討対象となっている。よりリスクや不確実性の高い自然環境の中で、二人で協同しなければ達成できない課題に、身体も含めた存在全体をかけて取り組むことで、対人関係構築がなされ、困難な挑戦の達成経験が学生の自己肯定感を高めていること、変容的学習によって教育効果が継続し、学部・学年の異なる学生同士でも親密な感情が保持されていることが確認された。

本論文は、以下の点で高く評価できる。

- ・日本ではまだ研究の少ない大学での冒険教育という領域において、準正課活動および正課教育の両方で具体的な教育プログラムの設計・実践を行うとともに、参与観察を通してその活動の詳細を描き出したこと。
- ・複数の質的・量的研究からなる混合研究法を用いて、冒険教育の短期的・長期的な教育効果を明らかにしたこと。とりわけ冒険教育が比較的短い期間で行われるにもかかわらず、その影響がいかにして持続しているかを明らかにしたこと。
- ・冒険教育の基盤となるモデル・理論を幅広く検討し、それをもとに自らの実践のプロセスモデルを示したこと。

今後、日本の大学教育において冒険教育を論じる際には欠くことのできない基本文献となることは間違いない。また、対人関係の構築や自己肯定感に困難を抱える学生に対し冒険教育を行う際の有用なガイドともなるだろう。

口頭試問でもこうした点は評価された。一方で、冒険教育の教育効果や教育的意義を議論する際に、主に経験学習モデルに依拠したこと、また質問紙調査において社会人基礎力の質問項目を援用したことなどから、冒険教育に独自な特徴であるはずの身体性や遊びの要素についての掘り下げが弱くなっているのではないか、という指摘もなされた。もっとも、これらは本研究の意義を損なうものではなく、今後、研究をより充実・発展させていく視点であることが了解された。

以上から、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和7年2月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降